

親の自分勝手に作つた子女が、人心が付き初めて自由を叫ぶ様に相成り候ても、我が子可愛い念より何に呉れとなく世話致され、それが嵩じて要らぬ處まで干渉して、寧ろ束縛さるゝなどはちと御控へなさる可く候と先生に申し上げ候は、先生屹つと驚いて腰を抜かさる可く候、いや先生の様に頭の中に微ひびが生へたるお方には、時々腰でも抜かしていや、始終微ひびとる事は随分面倒に候故、斯く一擧に御除りなさる方が御身の爲かと奉存候。

本來先生は戀といふものを御考へ相成り候事有之候や、承れば先生には未だ一度も御経験無之候由、されば戀に就いては何等御承知のあらう筈は無之、従つて口八ヶ釜敷彼此云はるゝ事も出来間敷、此段至極御同情申上候、が先生に於ては、男女七歳にして席を同じうせずといふ名言には、なか／＼全智識にあらせられ、拙者も此まで、耳に蛸たこが出る程拜承仕り居り候へば、尙此上とも御講釋を御願ひ申す儀には御座なく候、何は倍未だ一度も御経験無之候に不拘、男女青年が戀に夢中となりて遣へるを見られ、苦々敷事ぢや、と申さるゝは、先生もなか／＼の野暮ぢやと一言申上候、いや経験もせず従つて其の眞味も嘗めず、矢鱈に彼此申さるゝは、餘り出過ぎた要らぬ御沙汰かと愚考候、それとも先生には内心甚だ面白からずして、岡目八目から只管嫉妬ひたすの念にかられて、斯く申

大 正 新 書 翰

大 正 新 書 翰

さるるに候乎、されば先生なか／＼自己を欺く事に秀でられたるは、有繋先生なりと感泣可致候、いや、斯くも旨く御隠し遊ばさるゝに及ばず、今後の德育の参考とも相成り可申候間、一應思ひ切つて、戀人をつくられては如何に候はむ、然して充分御研究下され候は、拙者等青二才のみならず、先生如き微ひびの生へた先輩等の幸福、引いては皆が皆までも幸福可致かと被存候、いや／＼先生は石よりも、コンクリートよりも固い頭、従つて微ひびの生へやうも無之候へど、何時しか昔の生へたるを御存じ無之候と同時に、新しく若返つて一つ戀人でも探さうなどの事は致され間敷かと存せられ候、斯く致されば拙者等甚だ迷惑至極に存じ候、それとも先生には経験せざる點より今後一切戀愛に就きては御干渉下され間敷くや、もう既に干渉せずと申されば、先生が戀人を探されるや否やは、一に先生の御意のまゝに任かせ申す可く候、さりながら先生の恒として、御自分の昔の生へた頭をも知らず、何に呉れとなく口八釜敷申さるゝは、必然の話、甚だ困つた儀に候、或は先生に於てはそんな詰らぬ事は経験せずともよく承知して居ると申さるゝかも知れず候へども、その御存じ遊ばさるゝ點が甚だ怪しく候はずや、と申すは、先生は戀を見ては何時も悲觀なされ、而して戀そのものゝ眞味を觀察せられずして、その結果のみを彼此申さるゝ故にて候、物は起つて實を結ぶより考へて、先生は唯一結果のみを御覽

下さるは、そりや甚だ氣のきゝたる御觀察法には候へども、悲しい哉、先生は何時もの結果を御覽じて悲觀なさるにて候。尤も戀の終末は或は悲慘に終ることも有之候はむも、然らば、何故、先生はその悲慘なるを救ふといふ先生と同じ考方より、此を積極的に救済するの道を御教へなされざるにや。何時も先生は消極的に救済さるゝ事にのみ腐心せられ候が同じく救済するにても何故旨く纏の附く様に御考へなされざるにや。男女七歳にして席を同じうせずといふも畢竟戀の悲慘なる結果に終るを未發に防ぎたる最も消極的な救済の名言にて候はずや。等しくその悲慘なるを救ふといふ點より何故積極的に此を救済するのが悪く候や。ちと此邊よく御考へなさる可く候。

尤も先生は御經驗無之候ものから何時も消極的な針の穴ほどの御考しか浮び申さるは御尤もの儀に候。されば先生は此際ちと御經驗なされては如何に候かと御勸め致す可く候。まして先生に於て、積極的に戀の末路を救済するの道を考ふる丈、心に餘裕もなければ度量もなしと申され候は、尙此上の事御經驗が必要に候。御經驗も御嫌ならば寧ろ沈黙を守りて、何等御發言無之方却つて先生らしく候。右一言申上候。

○書生より

一、ドラマチストへ

「人形の家を觀て、分らぬといふた人は多數にて候。怒つた人は四十前後の男と聞き及び候。わけ分らずに喜んだのは女の由、而して小生等は宜い芝居と感せられ候が、泌々と胸が痛く相成るを覺え候。假令ノラが家出致すなどは、事實あり得べからざる事なりとするも、愛の意義も分らず従つてミラークルの何たるをも知らざる當世ハイカラ紳士に對する女の冷靜なる自覺は、何時もあれほどあり度きものと存じ候。さるにても新しい女が出来る當世と申しても、あれを觀て分らぬといふ丈、まだ、日本の女は駄目に候。願くば今少しく俗衆に分り易き様御考察下され候上、痛快に現代偽文明の當世を暴露下され度、さらずばいくら名脚本とて、何の役にも立つまじく、此點は偏に御留意下され度願上候。先は右御願まで。草々謹言。

二、伸、社會劇も結構に候へども、小生等生活難に一方ならず神經を疲勞致し居り候上、尙これよりも鋭く神經を使はねば觀られずでは、小生等の神經衰弱は遂に全治する時、も此れあり間敷此點も何卒御含み置き願上候。

二、自然派作家に

東風君、足下

配達夫の手から

平面描寫か側面描寫かは知らぬが、足下が事實は頑固にして又權威あるものなりと自覺してより、今日まで幾多の作物を公にせられたるは余の感歎せざるを得ぬ所である。余は足下の勞を多とすると共に、足下が今まで公にせられたる幾多の作物が、果して真なるかは甚だ怪しいと思ふものである。

足下は足下自身に於て、真なりと信じて居らるるかは知らぬが、余の眼から見れば果して何うだらうかと怪しむのである。何んとなれば事の眞を抽寫するといふ事が、果して出来得べきか否やは甚だ疑問だと思ふからである。否出来得べきものでないと斷言して憚らないのである。素より自分の眞の心持を抽寫する事は、出来るかも知れぬが、自分より離れたる客觀物がどうして眞實に描き出されやう。足下が今まで抽寫し來つた如く、只客觀物の外容のみを描寫するに於ても、一分經過せば凡ての形狀は以前のと異にするのを、何うしてそれをくどくどしく描寫し得やう。殊に或る長時間の間複雑したる人事を、そう手輕るに描寫してこれが事實であると申されやうかは、甚だ怪しい事ぢやあるまいか。況んや客觀物の内容に立ち入つて、細々と描寫し得やうとは、甚だ覺束ない事だ。足下が大言壯語して事實の描寫を貴しとするも、抑も足下は事實といふものを御存じあるの乎。或る一劃から或る點まで、足下が紙に寫し出すやうに事實といふもの

は、斯くも手輕るく引き離され得るものと思つて居らるるの乎。譬し切り離し得るものとして眞實描寫せらるゝとも、それが全くの事實かは素より疑問の話。否、足下の筆の跡には絶へず、足下の主觀が迷ひ入ることは必然であらうと思ふ。足下は足下丈の事實を作らるゝ點に於ては、確に偉大であらうが、それで以て足下の事實が則ち眞實であるか否かは、無論彼此論議する餘地もなからう。

足下よ、大言壯語するは罷められよ、寧ろ足下は足下丈の事實をおとなしく作らるゝ事に、奴力せらるゝが宜からうと思ふ。一寸申し上げて置く、暴言多謝。

三、新しい女に

明治も去つて、大正の御代となりました。ノヲを觀て、急に新しい女になられたのか知らぬが、これからは尙新しい女にならなければならぬ。御代となりました。嘸その御準備にお忙しい事だらうと思つて居ます。洋書を獵ることもその一つ、新しい思想をウソと貯藏せらるゝのも、その一つ。お序に背の低い所を身長器で毎日少しづつ伸ばしておかれるのもその一つ。尙此上にまさかの時の男に對する用意として、せめては柔道位は御心得置きなさるが宜からうと存じます。いや、慙う申しては何んですが、新しい女となられるには、それは、随分と御骨の折れる事だらうと御察し申し上げるのです。

家庭の道具や兒女製造の爲の女として今まで経過したのだから、此點より能く考へると、男子よりの屈辱から、思想の自由といふ點から、個人としての意識から、自覺し來つた御身等は、確に屈伏し來つた女子間に執つては、嚙溜飲の嚙つた事だらうと存じます。否溜飲の嚙るを自覺する女は、まだ現今に於ては少ないかも知れぬが、それ等の女子には、確に覺醒の良薬を與へられたのであると存じます。而して御身等は、今後は何所までも、男子と對立せねばならぬ覺悟は、無論の事、此を現實に表はす丈の力量も要するでせう。新しい女の御身よ、果して如何の御覺悟が御座らうか。何れ丈の力量を涵養せられて居るだらう乎。それを拜聞して、それから御身等に對する策略を廻らさうといふので、御伺ひ申すのではないのですが、第一、御身等は、男子と共に對立し得らるゝ丈の御體質でせうか。第二、男子の如く冷靜に沈着に事を思考し、此を處理なさる丈の頭腦が御座るのにもろいといふ點から、而して凡てに於て弱々しい氣分に捕はるゝが常であるといふ點から考へると、到底男子の様に冷靜に冥想し得らるゝ事などは、六ヶ敷だらうとも思はれるのです。

と申して御身の御覺醒なすつたのが、何等効果をもたらさないと、いふのではないの

大 正 新 書 翰

大 正 新 書 翰

です。よ、雀のやうに、いや雲雀のやうに喧嘩ぐのが、本來お好みになる御身等の事だから、一向新しいとも思へぬマダダさへ眼前に展開し來ると、やれ新しい〜と御喧はぎになつて、妾も故郷を觀に行つてよと、新し味を知らない女にさへ、一寸新しい匂をさせて歩かるゝ丈、確に御身等は、功績顯著で御座いませう。いや、少なくとも家庭の燻つた空氣より脱せしめて、『自己とは何ぞや』といふ丈の疑惑から起る覺醒を、傳播せしめられた功績は、蓋し古今未曾有のものでせう。が御身等が新しがるゝと共に、夫れ〜の御準備は、常に洋書を嚙つて新しい思想を涵養せられ、尙男と等しき身長を以て、決して男子に撞着せられざるの力量を養はるゝは、無論の事であらうが、其後は、奈何に活躍せらるゝかは、素より疑問の事であらう。いや、さ或る程度まで止つて、再度男子に屈伏せらるゝか、いや、今後の御身等の活動は、大に觀物であらうと存じて居ます。確に『人形の家』又は『故郷』以上の觀物であらうと、多大に御身等に嚙望して居ります。幸に御身等よ、御壯健であつて充實したる人生を實現せられん事を望みます。さよなら。

類語之部

大 正 新 書 翰

- ◎簡頭
- 拜啓 ○謹啓
- 拜呈 ○謹呈
- 肅啓 ○寸楮
- 寸牋 ○拙簡
- 一翰呈上仕候
- 一筆啓上仕候
- 一寸申し上げ候
- 亂筆呈上申上候
- 謹んで申し上げ候

- 申し上げます
- ◎返書に用ゐる簡頭
- 拜復 ○敬復
- 御手紙拜誦致し候
- 御書面拜見致し候
- 尊書忝拜讀仕候
- 芳墨拜見
- 貴簡拜承
- 有り難く御手紙拜見致しました

- ◎簡尾に用ゐる語
- 草々 ○不一
- 不具 ○不備
- 不宣 ○不盡
- 頓首 ○謹言
- 頓首再拜
- 稽顙 ○百拜
- 恐懼謹言
- 何れ拜眉の上
- 餘は御目にかゝり

大 正 新 書 翰

- て可申候
- 先は如斯に候
- 不取敢御返事まで
- 餘は面談の上にて
- 何分の御判談願上候
- 亂筆不悪御容赦下され度
- 何れ後便にてゆるゆる申上可く候
- さよなら
- 失禮いたします
- 以上

- ◎追書
- 又申し上げ候
- 又一寸申し上げ候
- 二伸 ○二白
- 追白 ○追啓
- 追伸 ○副伸
- 再伸
- ◎脇付
- 御親展 ○御直披
- 閣下 ○御臺下
- 侍史 ○執事

- 机下 ○尊下
- 貴下 ○楮下
- 座右 ○侍曹
- 玉案下 ○平信
- 平安 ○要信
- 無異 ○急用
- 當用 ○御中
- 座下
- ◎返書に用ゐる脇付
- 御答 ○尊答
- 貴酬 ○貴答
- 貴報 ○拜復

大 正 新 書 翰

○拜答 ○拜酬
○奉復

◎封緘

○封 ○糊 ○固

○緘 ○フ

○壽賀(祝賀の時に用ふ)

◎稱呼

自己の稱呼

◎先方に對する自

分のことを。

○小生 ○拙者

○野生 ○小子

○迂生 ○不肖

○私 ○僕

○我輩 ○愚生

◎自分の父母のこ

とを。

○家父 ○親父

○愚父 ○老父

○兩親 ○父母

○愚母 ○老母

○慈母

◎自分の妻のこと

とを

○拙妻 ○愚妻

○家婦 ○拙婦

○荆妻 ○妻

○家内 ○賤妻

○愚婦

◎自分の子女のこ

とを

○愚息 ○伴

○豚兒 ○愚娘

○息女 ○兒女

○小供 ○小供等

○兒輩 ○小兒

◎自分の兄のこと

大 正 新 書 翰

を

○家兄 ○舍兄

○阿兄 ○愚兄

◎自分の弟のこと

を

○舍弟 ○愚弟

○家弟 ○小弟

◎自分の姉妹のこ

とを。

○家姉 ○家姐

○舍妹 ○小妹

○小嬢 ○愚妹

◎自分の居宅を。

○拙家 ○拙宅

○弊舍 ○弊店

○弊屋 ○弊社

○弊舖 ○當舖

○當社 ○當舍

○茅屋 ○茅舍

○陋屋 ○草屋

◎自分の地方を。

○當地 ○當方

○此地 ○此村町

○當所 ○弊地

◎他郷にありて自

分の郷地を

○故郷 ○郷里

○國元

他人の稱呼

◎身分の高き人に

は

○閣下 ○臺下

◎師に對しては

○先生 ○恩師

○尊師

◎親しき友人には。

○君 ○兄

○大兄 ○足下

○學兄 ○貴下

○老兄 ○貴殿

●他人の父母を

○御親父様

○御尊父様

○御嚴父様

○尊大人 ○尊翁

○御父上様

○御老公

○御母上様

○御母君

○御老母

○御兩親様

○御双親様

○御二方様

○御兩所様

●他人の妻君を

○御令閨様

○令閨

○御家内

○令室

○令夫人

○御新造様

○御内君

●他人の子女を

○御子達様

○御子息様

○御令息 ○御賢息

○御令嗣 ○御愛子

○御令嬢 ○御尊女

○御娘御様

○御息女様

●他人の兄弟姉妹

を

○御兄上様

○御兄君様

○御令兄 ○御大兄

○御姉上様

○御姉君様

○御令姐 ○御令弟

大 正 新 書 翰

○御弟君 ○御令妹

○御妹君

●他人の居宅を

○御尊邸 ○貴邸

○御邸 ○玉堂

○御尊家 ○御高堂

○貴館 ○貴社

○尊宅 ○御宅

○御店 ○御住居

○貴舗 ○貴肆

○貴店

●他人の地方を

○御地 ○貴地

○錦地 ○御地方

○御町内 ○御郡下

○御尊地 ○貴郷

○時候

●春

○一寸梅も笑ひ候

○梅も笑ひ候へども

○餘寒去り難く候

○春が來たとて、なか

く寒く候

○成程これが餘寒と

申すものにや春と

も思はれず候

○残つた寒さが殊の

分烈しく候

○追々暖かく相成り

春だと思はれ候

○春意も漸く催し

○春の暖かさ、そゞろ

催し來たりては

○追々暖氣を覚え申

し候

○春陽のこの頃

○至極散歩には好時

節

大 正 新 書 翰

- 春風そよよ吹いて來たり候
- 鳥がさへずる梅が笑ふ
- 沈として居られず候
- 春風駘蕩
- 四方景色なか愉快に相成り候
- 長閑なる日和
- 春郊散策に妙なる時
- 山もおぼろにかす

- 云ふに云はれぬ愉快を感じ候
- しとくと降る春雨
- 山野にばつと春色浮び
- 面白いほど花笑ひ
- 柳の芽も伸びて
- みどりが滴たり
- 時候が納まらず

- 花も散つて参り
- 青々とした新緑の色が物懐く
- 春遂に去つて夏参り候
- いよよ暑く相成り
- 暑いと云ふても暑さは去らず
- 氷水が兎角命と思ふ暑さ
- 益々酷暑相加り候
- 居睡も先づ消夏の

大 正 新 書 翰

- 良策
- 焼け着く光線の眩ゆく
- 孟夏の候
- 馬鹿に暑つく相成り
- 暑中といふても此頃の暑さと來たら
- 眼藥りの眼に入つたやうな暑つい光線
- とても堪へ難き暑氣にて

- しとりくと降る雨の鬱陶敷
- 毎日々々の雨はいやに相成り候
- 疊にじわつく心悪るさ
- 雨も雨だと空を仰いで歎息する氣候
- 團扇もなかしく離
- 炎暑々々
- 凌ぎ難く
- 恚う暑くては居た

- たまらず
- いらくすること限りなき暑さ
- 焼きつく土地をながめては到底沈として居られず
- ◎秋
- 殊のほか残暑きびしく
- 兎角暑氣が去らず
- 去り難きまゝ紅連大紅連と騒いで
- 朝な夕なには少し

く冷氣を増して來

り

○そよ吹く風が來れ

ば秋かと

○身に染みて吸ふ氣

も晴々しく

○秋冷相加はり

○秋氣清く

○野邊の黄金色に

○山といひ野といひ

澄み渡る景色

○得も云はれず

○馬ながら肥え行く

やうに

○食慾とみに増加し

て

○秋の光うら淋しく

○柿の木の赤く染め

られ

○菊花獨り香をほこ

りて

○山の色も紅葉に彩いろど

られて悲しく

○谷川に流る、水も

殊の外清く見られ

て

○心持何んとなく落

ち着き

○燈下の親しみいよ

いよ深く

○沈思默考も今が好

時節

○靜に人生を思ひ得

る時

○秋くれてはあたり

の景色物懐く

○いよく暮秋と知

られ候

◎冬

大 正 新 書 翰

○寒冷日に増し

○追々寒く相成り

○寒冷を覚え候

○寒冷の候

○嚴寒の候

○手も足もしびれや

うな寒さ

○酷寒の候

○酷寒の砌

○寒さ厳しく候

○寒中とはいへ昨日

今日の寒さ

○嘗てなき寒さ

○例年になき寒さ

○堪へがたき寒さ

○寒さ凌ぎがたく

○馬鹿に寒く候はず

や

○寒威凜烈

○寒威肌を刺す

○寒威日に嚴びしく

候へども

○雪の白いので氣も

晴々致し候へども

○この寒さ計りは古

今未曾有にて

◎謝 辭

○謝し奉り候

○謹みて謝意を表し

候

○いやはや何んとも

申し上げやうもな

く

○御懇情骨髓に徹し

謝する言葉もこれ

なく候

○泌々とどろと身に染みて

○御懇志身に染みて

覚え候

- 萬謝奉り候
- 多謝奉り候
- 多謝々々
- 謝罪々々
- 深謝
- 感謝
- 感謝する
- 感謝に堪へず
- 感謝の至り
- 千萬御禮申上候
- 御厚禮申上候
- 深く御禮申上候

難有奉存候

- 忝く候
- 厚く御禮申上候
- 御禮の申上様もこれなく候
- 何んと御禮申してよきやら
- 何れ參堂
- 何れ御面會の上
- 御禮申上べく候
- 拜眉の上萬謝仕るべく候
- 御詫び申上候

容赦を乞ふ辭

- 御許し下され度
- 御容赦下され度
- 御用捨下され度
- 眞平御免下され度
- 平に御免し下され度候
- 御宥恕下され度候
- 御宥免下され度候
- 御許容なし下され度候
- 御海容下され度候

大 正 新 書 翰

- 御容謝の程懇願奉り候
- 御寛恕下され度候
- ◎ 無音を謝する辭
- 御互の御無沙汰失禮仕候
- 御無沙汰申候
- 意外の御無音
- 兎角御無沙汰のみ致し
- いつもく多忙に取紛れ心外の無音

申譯もなく

- 何にかと取紛れ
- 何呉れとなく
- 心ならずも御無沙汰仕
- 御互に御無音なればとて失禮致し
- 其後は打ち絶えて御無沙汰申候
- 爾後打ち絶えて御無音
- 意外の疎遠
- 其後は何んの便り

も致さず

- お分れ致し候以來いまだ音信もせず
- 馬鹿に御無沙汰致して濟まず
- ◎ 起居を問ふ辭
- 御變りもあらせられず候や
- 此節如何に候や
- 皆様御障もなく入らせられ候や
- 御無事に入らせら

れ候や

- 御一同様御安泰に入らせられ候由
- 愈々御清榮
- 如何遊さるゝにや
- 益御機嫌能
- 皆々様御揃ひ御機嫌よく入らせられ
- 御恙もなく御暮しのよし
- 愈々御雄健
- 愈々御多祥
- 御壯健
- 御壯榮

- 御健全
- 御勇健
- 御清適
- 御清福
- 御繁榮
- 御堅勝
- 御安泰
- 御清穆
- 御盛榮
- 御健勝

◎起居を報ずる辭

- 御健全
- 御勇健
- 御清適
- 御清福
- 御繁榮
- 御堅勝
- 御安泰
- 御清穆
- 御盛榮
- 御健勝
- 無異消光罷在り候
- 例により壯健
- 頑健
- 安固
- 健全
- 平居
- 幸に健全
- 拙家一同安全
- 異状もなく暮し居候
- 人間並の呼吸は致し居り候へども
- 至極皆々健全

大 正 新 書 翰

◎安心を乞ふ辭

- 御安心下され度
- 御安神下され度候
- 御休心下され度候
- 何卒御放念下され度候
- 御安心
- 御安意
- 御安堵
- 御休憩
- 貴意を勞するを休めよ
- 安心めされい
- 乞ふ安心あれ

- 先づ御安神下され
- 念慮を勞するなか
- 參上
- 參上
- 參堂
- 拜襟
- 御伺可申上候
- 何れ其うち參上可
- 早速參上可仕

◎來臨を乞ふ辭

- 後刻參堂仕べく候
- 御來車下され度
- 御待ち申上候
- 是非御來車下され度
- 御光來下され度候
- 御越しなされ度
- 御賁臨
- 御來駕
- 御臨席
- 御來會
- 御來訪
- 御來
- 御入來
- 御枉駕

○御出て下され度候

◎面會

○拜顔 ○拜趨

○拜眉 ○面晤

○拜接 ○拜面

○拜調 ○拜芝

○いまだ拜顔の榮を得ず

○尊顔を拜し

○御目に懸り

◎返報を乞ふ辭

ち申居候

○御返事相待ち居り

○御返事御待ち申候

○折かへし御返事被

下度候

○是非共御返事下さ

れ度

○此狀着次第御返事

下され度候

○御承諾の有無御漏

し下され度候

○早速御返事願度

○御返報を煩し度候

○兎角の御返事御待

◎慶・賀

◎新年

○貴答を煩し度候

○貴酬を待つ

○是非御返事呉れ給

へ

○貴答を待つ

○御手數ながら御返

事下され度

○御差支なき時日御

示教被成下度候

大 正 新 書 翰

○謹賀新年

○恭賀新年

○謹賀新禧

○新年の御慶

○改曆の御慶

○新年の吉兆 ○吉慶

○新玉の年の始めの

御慶

○年たちかへる空の

景色もうらゝかにて

○賀正 ○新正 ○新禧

○歳旦 ○年始 ○年甫

○歳始之嘉祥

○松竹のいろ變らず

目出度申納め候

○先はお目出度存候

○門松にさす朝日の

光り國旗に閃く風

の姿

○尊堂 ○貴家

○尊家御一同様倍御

壯健にて御超歳遊

され恭賀奉り候

○皆々様御機嫌能く

○御越年 ○御加齡

○御迎年 ○御重壽

○鶴龜の齡を重ねさ

せられ目出度存じ

奉り候

○千代萬代の限りなく

○大賀の至りに存じ

奉り候

○歡喜斜ならず候

○拙家一同無事越年

仕り候

○無異馬齡を加へ候

○一ツ年をとり候

○當方(弊家)一同

○小生例の如く健全

大 正 新 書 翰

- 無恙消光仕居り候
- 碌々頑健
- 疎濶 ○疎遠
- 毎度ながら御無沙汰仕り謝し奉り候
- 御容赦下され度候
- 御宥恕 ○御許容
- 御高免 ○御海容
- 舊年中は種々御厄介に預り難有存じ奉り候
- 昨年 ○客年 ○去歲
- 舊冬 ○舊臘
- 御厚情を蒙り忝感謝奉り候
- 新年早々賀状下され難有存奉り候
- 御年賀に預り
- 年頭の御祝儀として粗品進呈
- 年甫御祝辭の御驗し迄に進上仕候
- 松魚一折呈上仕り候
- 御笑納下され度候
- 御吃留下され度候
- 御笑味下され候はば幸甚
- 御年賀として
- 手毬 ○羽子板
- 福壽草 ○白梅一鉢
- 鱒一尾 ○鶏卵一折
- 正宗一樽
- 白砂糖一樽
- 猶相變らず御愛顧被下度偏に願上候
- 御眷顧の程希上候
- 婚姻
- 今回御良縁整はせ

大 正 新 書 翰

- 御婚儀芽出度濟ませられ
- 御婚禮滞りなく濟ませられ
- 華燭の典を挙げさせられ
- 合盃の式首尾能く御濟せ
- 御兩親様嘸御安心なさるべく
- 玉椿の八千代をかけて御壽き申上候
- 千代八千代つきせぬ例の御祝 ○相生の松の色かへぬ御契り
- 千代の鶴萬代の龜の齡の末ながく
- 松竹の契り幾千代かけて
- 借老の契り
- 同穴の約
- 桃夭の御嘉偶
- 人生の第一義
- 兎に角お目出度
- 學徳かね備はらせ給へる御伉儷
- 慶賀の至りに存候
- 御結婚の御祝ひまで
- 御祝辭の印までに進呈
- 祝意を表し度
- 此程兩親の命により婚儀とり結び候
- 某氏の媒酌により縁談相調へ
- 幾久しく御受納下

され度候

- 千秋萬歳幾久敷
- 謹みて祝意を表す
- 人生只一回の祝典
- 喜悅斜めならず候
- 欣喜雀躍の至り
- 抃舞の至り
- 欣喜の情禁ぜんと欲するも能はず
- 人事ながら
- 沈ちぢとして居られず
- 欣然として手の舞ひ足の踏む所を知

らず

- 暫らくは夢幻にて候はむ
- 仲善くなさる可く候
- やつと妻を貰ひ受け候
- 一人で生かさへ六ヶ敷きに
- 此上二人前の仕事をせねばならず
- 薪水の婦を貰ひ受け候

◎年賀

- 還暦の御賀(六十二)
- 古稀の御賀(七十)
- 喜の御歡あそびひ(七十七)
- 米壽の御祝いそぎひ(八十八)
- 九十の御齡に達せられ
- 年波の跡も見えさせ給はず
- 恭賀の至りに候
- 大慶至極に候
- 御招待を蒙り難有

大 正 新 書 翰

大 正 新 書 翰

- 存じ奉り候
- 忝く存じ奉り候
- 御招待に預り
- 御招待の榮を得
- 必ず参上可仕候
- 屹渡拜趨可致候
- 是非参堂仕べく候
- 兩三日來風邪にて引籠り居候間遺憾ながら参上仕兼候
- 何卒悪しからず御承引下され度候
- 當日止むを得ざる

差支これあり

- 愚息某代理人として差遣し可申候
- 此品粗末ながら御祝詞の驗しるしまでに進呈仕候
- 御祝ひの驗し迄に進上仕候
- 御受納被下度候
- 何うぞ御受け下さい
- 御笑納下され度候
- 一は歡び一は恐るゝの齡ですが

○驗しばかりの賀宴

- 相開き可申候
- 御祝ひの品有がたく受納奉り候
- 早速参堂御禮可申上の處
- 取込中の事として
- 何かと取紛れ居り
- 失禮ながら書面を以て御禮申上候
- ◎出産
- 今曉御令閨様御安産
- 兼ねての御宿志も

大 正 新 書 翰

- 首尾克く
- 兼ねて御志望の御男子御出産にて
- 御母子共至極御健全の由
- 御女子御出産
- 御繼嗣御出生にて御兩親始め皆様の御悦びさこそと御察申上候
- 玉の如き若君ゴウキョウ御誕生
- 瓜二ツの御令嬢
- 後刻參堂御祝詞申上べく候へ共
- 取あへず御祝まで
- 兎角氣候不順に候へば
- 御養生專一に祈り入り申し候
- 愚妻分娩いたし
- 何時の間に知られたか
- 御聞及びに相成り
- 早速御祝下され有り難く存じ奉り候
- 御祝の品色々頂戴仕り御深せつ有り難く存じ奉り候
- 陳謝致します
- 殊に結構なる品御祝下され愚妻も大ひに相歡び居り候
- 母子共至極健全ですから憚ながら御安神下され度
- 御嬰兒様も日々御肥立ちの由
- 兎に角御目出度次

大 正 新 書 翰

- 第 一
- 卒業
 - 平素御勉勵の功顯はれ優等て御卒業
 - 螢雪の功空しからず目出度御卒業
 - 夙夜習練
 - 日夜苦學の結果首尾能く卒業せられ
 - 此上とも國家の爲め一層の御勉勵
 - 示後社會の爲鞠躬御勵精せられ度
 - 多年刻苦修養の御手腕を顯はされ度
 - 斯道のため御盡力希望致し候
 - 御兩親の御よろこび嘸かしと御察し申上ます
 - 御兩親御一族にも定めて御満足と察し上候
 - 老婆心より聊いさか御注意申上置候
 - 別冊壹卷御參考の料ともならば幸甚
 - 相心付候まゝ御參考迄に愚案申上候
 - 偕卒業は致し候ものゝ性質愚鈍の拙者
 - 刻苦未だ至らず
 - 修養いまだ足らず
 - 名實の副はざらむ事を懼る
 - 兎角經驗に乏しく
 - 素より實力もなく
 - たゞ御指導の下に
 - ひたすら御教指を

仰ぎて

○及ばずながら奮勵仕るべく候

○努力奮闘可仕

○尙此上共勉強可致

○此上とも何かと御指導被下度候

○世間見ずの小生

○何分の御指導を仰ぎ度

○不取敢御禮申上候

●新宅

○御新築御落成のよ

し

○眺望絶佳の御別荘

○前に波滄を抱き後に山を負ひ

○幽邃閑雅の御別荘

○廣き御庭苑四方の詠めも嘸かしと

○羨望の至りに候

○お羨しく存じ候

○拜觀旁參上可仕候

○來る日曜に參り御祝ひ申上べく候

○俄に建築したので

造作も未だ調はず

○心ばかりの祝宴

○只御披露までに

○一寸新築御知らせまでに

○御散歩がてら

○何卒御來遊下され度候

○是非御光來下され度候

○御勝手もとの御料にもと雜品取交せ呈上仕候

大 正 新 書 翰

●開店

○御開店の御祝ひ

○いよゝ御開店

○千客萬來

○御招き下され

○ほんの開店の印まてに

○昨日は賑々しく御開店のよし

○随分と御準備に忙しく

●梅花

○頃日來の好天氣

○紅梅ちらりと咲き初候

○仙姿兎角愛すべく

○某園の梅満開の由

○香は園に満ち

○吟懐の料ともなら

○冬籠りに飽きはて候へば

○一枝御目にかけて候

○玉瓶に御挿み下さ

れ候はゞ

○芳香芬々

○得もいはれぬ宜い心地がして

○此快晴の日一日くすぶるのは

○終日の籠居は無風流の骨頂

○終日蟄居とは驚く

○御誘引を蒙り

○御誘ひ下され

○御同伴仕るべく候

○御立ち寄りくださ

◎誘引

れ度候

- 是非に御伴仕度候へども
- 折角の御誘引
- 無下に斥け難く
- 遺憾ながら
- 残念ながら
- 據なき用事出来差支候
- 御伴仕りかね候
- 悪しからず思召被下度候
- 何うぞ悪しからず

●観櫻

- 某園の櫻花ほころび初め候由
- 某よりの來信によれば
- 來日曜頃は見頃の由
- 花は半開とやら申して
- 雨風に傷まぬ内
- 是非お供致し度
- 春色漸く整ひ
- 散策の好時節

- 某園の櫻花爛漫妖艶人を惱殺すとか
- 廣園の佳興は花時の事と存じ残念ながら思とまり候
- 新緑の時を期して
- 散策
- 春の花野
- 四方の山々春めき候
- ほんのりとした氣分に
- 酔ふも此頃

大 正 新 書 翰

大 正 新 書 翰

- 浩然の氣
- 春景色漸く整ひ
- 堇蒲公英咲き亂れ
- 眺めも面白き春の野邊には
- 是非近郊散策御勸め可致候
- 螢狩
- 某處の螢は近年稀れなる發生の由
- 頗る美觀を極め候由
- 納涼旁

○御散歩かたぐ

- 御子様達御連れ
- 御越しなされては
- 螢狩も亦一興かと存じ候
- 避暑
- 炎熱焼くが如く
- 三伏の酷暑
- 兩三日來の暑さ九十五度に至り
- 到底辛棒も出来ず
- 堪へがたく候
- 沈ッとはして居ら

れず

- 殊に本年は流行病も諸所に起りし由
- 海水浴 ○湯治
- 登山
- 避暑
- 色々と思ひ立ち候へども
- 一人旅も一向面白からず
- いまだ好友もなく
- 宜い旅連もなうて
- 御都合如何に候や

大 正 新 書 翰

- 電車汽船の連絡もあれば
- 涼しき潮風浴びて
- 松の陰波打ちぎはのそゞろ歩きも
- 人里遠き深山の奥
- 名も知らぬ鳥の囀り
- とても市井の酷暑とは比す可くもあらず
- 谷川の流を掬ひ
- 山間の流に
- 興深かゝらむ
- 詩趣多からむ
- 是非御出かけの程
- 必ず御來訪
- 御令閨御連れあらば
- 哀 悼
- 俄の御變症
- 養生叶はせられず
- 御死去なされ
- 御逝去遊され候由
- 左程の御大患とも
- 存じ申さず
- 皆々様の御看護も
- 其甲斐あらせられず
- 御持病重らせられ
- 只々驚くの外なく
- 御訃音に接し驚き入り候
- 嗚々御愁傷の程察し入奉り候
- 御一同様の御愁傷は御察し申上候
- 推察仕り候
- 老父など御親父様

大 正 新 書 翰

- には格別の御厚誼を蒙り
- 今更の様に落膽いたし居候
- 遠路の事故先は書面にて御見舞申上候
- 謹みて弔意を表し候
- 輕少なから御靈前に御供へ被下度候
- 御香料 ○御香奠
- 玉串料 ○神饌料
- 老少不常は世の様
- と御諦めなされ
- 尙此上悲しまれて御身に障りありては御家の大事に候
- 何かの御用事にまてと思ひて
- 出入の者差出し申候
- 御遠慮なく御使ひ下され度候
- 相當の御用仰せ付け下され度候
- 早速參堂御悔み申
- 上度候へ共
- 病氣にて打臥し
- 俄に己むを得ぬ用事出來
- 失禮ながら
- 甚だ申譯難く候へども
- 書面を以て御悔み申上候
- 取あへず御吊悔申上候
- 兼て御厚誼を蒙り候親父

大 正 新 書 翰

- 兼ての病氣再發致し
- 持病に惱み居り候處
- 數日來風邪にて
- 俄に容体相變り
- 藥餌も覺束なく
- 醫藥も其効なく
- 逝去仕り候處
- 早速御見舞下され
- 早速と御見舞に預り
- 御丁寧なる御弔詞
- 下され
- 形ばかりの葬送營み候
- 兎角現世は夢か現の様に
- 夢の様に覺え候
- 殊に病氣中は度々御見舞下され
- 遠路御會葬下され
- なにくれとなく御配慮下され
- 御厚意の程感謝仕候
- 厚く御禮申上候
- 早速參堂御禮申上べくの處取り込み居り
- 重ねくの欠禮
- 書面を以て御禮申上候
- 何かと取紛れ
- 御令閨様
- 幼き御子様を殘され
- 御愁傷も嘸かしと御察申上候

大 正 新 書 翰

- 若し相當の御用も候はゞ御遠慮なく御申聞け被下度候
- 御子様方の御悲しみ
- 御令息様
- 俄の御病死
- 老少不定は世のならひ
- 月に叢雲花に風
- 御尊父様不慮の御災難にて果敢なき御最後
- 充分御看護の上の御逝去にても
- 御職務とは申ながら不慮の御最後
- 不慮の御死去
- さりながら御職のため倒れたる御名譽
- 永遠に傳はり申すべく
- 御令息様
- 各地に御轉戦
- 屢々の御戦功
- 名譽の御戦死
- 敵彈に當り名譽の御最後
- 然し御名は軍人の龜鑑として永遠に傳はり可申候事故
- 御國のため君のため
- 天晴れの御働き
- 御國のために殉じたるもの
- ◎請求

大 正 新 書 翰

- かねて御用立置ました何品
- かねて差上置候何々
- 一寸必要を生じ候間
- 御用済みに候はゞ
- 御覧済に候はゞ
- 一時御返し被下度
- 用済の上は又々差出し申べく候
- 兼て差上げ置候何々の代金
- いまだ御拂ひなく如何の次第
- 帳簿の整理上甚だ困却仕候
- 至急御拂込み下され度
- 何年何月以來何ヶ月分滞り居候
- 是非何日までに
- 何日までに御拂込み下され度候
- 兩三日中に集金郵便差出し申すべく候
- 此者に御渡し被下度候
- 集金人差出申候間
- 御留守中にも相分り候やう願上候
- ◎報知
- ◎死去
- 長らく病氣の處
- 某地靜養中
- 某病院に入院中
- 俄然變症來り

大 正 新 書 翰

- 藥石効なく
- 何日何時死去いたし候
- 兎に角御通知まで
- 追て葬式の儀は何日何時何寺へ
- 自宅出棺某地に埋葬
- 神葬 ○佛葬
- 友人某君病氣の處
- 白玉樓中の人となり候
- 永眠
- 不歸の客
- 黄泉の客
- 運命とはいへかへすくも殘念の至りに候
- 芳園羨み易きは世のならひとはいへ
- 不慮の炎に罹り
- 只今當地に投宿仕り
- 道中無事歸着仕り候
- 恙なく歸宅仕り
- 右取あへず御報申上候
- 御話の通り當地は風景絶佳
- 明日は某地向ふ心算にて
- 某君を訪問いたし何地へ投宿の豫定
- 今般都合により某地へ轉居いたし
- 御序の節は御立寄り下され度候
- 御配慮を蒙りし某

大 正 新 書 翰

- 校今般御蔭を以て漸く卒業仕り候
- 僥倖にして卒業生の列に加はり申候
- 猶も相變らず御示教被下度候
- 幸にして入學試験に及第仕候
- 入校を許され候
- かねて御話申上候件漸く相定まり候
- かの件やつと落着致し

- 準備整ひ明日より開店の運びに至り
- 愈々明日より開業
- 御奔走下され候何會愈々來る何日發會式を擧ぐることに相成り候
- ◎招待
- ◎結婚披露
- 子息某今般婚儀相濟み候に付
- 結婚の式相濟み

- 御披露旁
- 印ばかりの祝宴
- 形ばかりの祝宴相開き
- ほんの印までに
- 一献奉り度
- 粗酒差上度
- 親戚知友を招き
- 御近づき願度
- 何の風情もこれなく候へども
- 遠路甚だ御迷惑ながら

大 正 新 書 翰

- 御都合御差練りの上
- 御都合御繰合せ
- 是非共御枉駕下され度
- 準備の都合も有之候間
- 御都合承り度
- 御諾否
- 右御案内申上候
- 諾否の有無何卒御漏らし被下度候
- 御待ち申上候

- 先達て長男結婚の節は御懇情なる御祝被下
- 拙家にとりては佳禮に候間
- 御多忙の御中至極御迷惑ながら
- 御光來被下候はば幸甚の至りに候
- ◎法會
- 來る何日は亡父の一週忌に當り(相當いたし)候間

- 三回忌
- 七回忌
- 十年祭
- 百年祭
- 一族相集りて
- 親戚一統相會して
- 生前御厚情を蒙りたる諸君
- 御親交賜はりし方々(知友)
- 墓碑落成に付法會營み度候間
- 心ばかりの祭り(法會)いたし度候間
- 昔を語り故人の靈

大 正 新 書 翰

- 追善いたし度候間
- 園遊會
- 廣からぬ庭の櫻も
- 來る日曜頃は見頃
- 今が眞盛りにて
- 盛り過ぎぬ内に
- 花に嵐のたとへも
- あらば
- 兎角花は散り易き
- ものから
- 三日見ぬ間の山櫻

- 庭園の櫻花今を盛りと咲き亂れ候
- 躑躅山吹も咲き揃ひ候
- 庭前の藤咲きそめ
- 池の藤浪
- 垣の卯の花
- 若葉の陰に語り
- 新緑の眺めに
- 庭の紅葉も一入の色増し候
- 此程の雨にて廿日頃染盡し可申と存

- 庭園の菊も數種咲き揃ひ申候
- 園遊會催し度
- 珍らからねど餘興も種々之あり
- 雨天順延
- 誕生日
- 小生の誕生日にて
- 心ばかりの祝ひ
- 在學中親しき友達ち相會し
- 御承知の某氏も來

大 正 新 書 翰

- 會の筈にて
- これといふ御馳走は無之候得ども
- 山海の珍味はなくとも
- かるた會
- 來る何日例により
- かるた會相開き度候
- 是非共一方の勇將として御出陣被下度
- 一方のチャンピヨ

- ンとして御出馬願度
- 彼の有名なる
- 某君も出陣の筈に候
- 今より練習いたし居候
- 御令妹様同伴
- 徹夜の御覺悟にて御出かけ被下度候
- 何んといふても出て貰はねば
- 小生等の不名譽

- 餘興も種々あれど天機漏すべからず
- いや色々面白事も出やう
- 隠し藝も序に
- 御趣向もあらば御示教下され度候
- 今より練習會稽の耻を雪がむ覺悟に候
- 慰問
- 病氣見舞

大 正 新 書 翰

- 承れば
- 承り候へば
- 御不快の由
- 御病氣の由
- 其後の御容態如何候や
- 其後如何に候や
- ちとおよろしき事かと
- 遙察致し候
- 先達中より御不快の趣き傳聞致し如何と御案じ申上候
- 老體の御事故
- 御苦惱の程も被察
- 日頃の寒さには頑健の小生さへ閉口仕る位
- 此頃の暑さには辛棒も出来ず
- 御障りもあらせられずや
- 御案じ申上候
- 御心配申上候
- 御難儀の程御察し申上候
- 御案じ申居り候
- 推察仕り候
- 遙察致し居り候
- 其後の御經過如何に候や
- 實に不順勝な此頃
- 兎角不順の氣候
- 一日も早く御全快のやう
- 何分とも御養生の程
- 十分の御療養
- 尙此上とも御注意

大 正 新 書 翰

- 願度
- 吳々も御加養の程祈り上げ候
- 此品輕少なから
- 甚だ粗末に候へども
- 御見舞の印までに
- 御笑留被下度候
- 御笑味被下度候
- 御受納下され度候
- 先は御見舞まで
- 何れ參堂御見舞申上べく候
- 兩三日來持病に苦しむ居候
- 色々と御見舞の言を頂き
- 早速御見舞被下難有奉存候
- 何よりも結構なる
- 殊に何よりの御品御惠贈被下
- 御惠投被下
- 感謝致し候
- 深謝奉り候
- 追々輕快に趣き候
- 次第と快方に趣き候
- 食事も進み申候
- 此分にてはそのうち全快いたすべくと存候
- 御安神被下度候
- 取あへず御禮申上候
- 喪中見舞
- 御喪に籠らせ給ふ程
- 御喪中見舞申上候

大 正 新 書 翰

- さらでも物悲しき
此頃の空の灰色
- 嘸御愁傷の事と存
じ候
- 御淋しさも一入と
御察申上候
- 御看護の御疲れも
これ有べく
- 御落膽の程千萬御
察申上候
- 兎角の御心痛はよ
ろしからず
- 心配のあまり御身
に障り不申様
- 残り給へる御子様
達
- 何事も運命(因縁)と
御諦めのやう祈り
上げ候
- いつもく御心添
へ下され
- 毎度御親切に
いつもながらの御
厚情
- 御心添の程は厚く
御禮
- 何かにつけて
- はかなき愚痴をこ
ぼし申候
- 詰らぬ愚痴とは存
じながら
- つい愚痴とは知り
つゝ
- 此上とも御心添へ
被下度幾重にも願
上げ候
- 留守見舞
- 御父君様此度某地
に御赴任せられ

大 正 新 書 翰

- 御旅行の由
- 御出張
- 御留守中嘸かし御
淋しき御事と存じ
候
- 御手紙によれば
- 某君より承れば
- 二三箇月は御滞在
の由
- 相當の御用も有之
可しと存じ
- 何に呉れとなく御
不自由に
- 御不自由の品も候
はゞ
- 遠慮なく
- どしくと御申起
し被下度候
- 御申聞け被下度候
- 御腹臆なく御申し
付け下され度
- 御仰せ付け下され
度候
- 兎角多人數に候ま
ゝ
- 拙家は多人數の事
- 申さるゝまゝに
- 御厚情にあまへ御
願申上候
- 折角にも
- 御親切に申さるゝ
に甘へて
- 留守中だけ拜借仕
り度
- 御禮旁御願申上候
- 火災見舞
- 昨夜は不時の御災
厄

大 正 新 書 翰

- 御類焼の由
- 漸く本日の新聞紙にて承知いたし候
- 今朝の新聞紙上によれば
- 只今電話にて拜承すれば
- 此程の大火に御類焼の由
- 全く驚き候
- 驚き入申候
- 皆々驚くと共に心痛致し居り
- 驚愕仕り候
- 近火
- 御怪我もなく御立ち退きの由
- 不幸中の御幸と申すべくや
- なにより御幸にて取敢へず御見舞申上候
- 出入りのもの數名差出し申候
- 相當の御用仰付け被下度候
- 御使ひ被下度候
- 早速と御見舞を頂き
- 御見舞被下有難奉存候
- やつと庫だけは残り候
- 何にもかも灰と相成り
- 全焼いたし候
- すつかりやられ候
- 幸ひ怪我もなく立ち退き候
- 不幸中の幸とも申

大 正 新 書 翰

- すべくや
- 負傷もなく立ち退き申候
- 御休神下され度
- 御安心被下度候
- 乍憚御安心下され候
- 取あへず御禮申上候
- やつと調度だけは持出し申候
- 混雑を極め
- 取込み中失禮ながら手紙を以て御禮
- 申上候
- 混雑中に候へば
- 何れ參堂御禮申上べく候
- 水害、風害見舞
- 稀有の大風
- 非常の洪水
- 連日の雨に
- 毎日々々降り續く雨に
- 引き續きの雨に某河汎濫致し
- 大洪水
- 土堤潰れ
- 田畠を流し
- 浸水致し申さずや
- 御庭の木々には御障りもあらせられずや
- 床の間も赤く彩られ
- 塀など倒れ
- 植木も倒れ
- 殆んど見るかげもなく
- 未曾有の水害

大 正 新 書 翰

- 意外の暴風雨
- 所々潰家多きよし
- 流失家屋
- 浸水家屋も多く
- 無論作物の損傷は
尠なからず
- 人畜の損傷も多く
- 幸ひ人畜に害なく
- 御安神被下度候
- 汎濫の様實に凄く
にて
- 近年稀れなる洪水
- 作物には餘りの損
害はなく
- 田畠には損害少く
- 當地は幸に其難を
免れ候
- 時候見舞
- 皆様いかゞ御暮し
被遊候や
- 御一同御變りもあ
らせられず候や
- 此頃の暑さ(寒さ)に
は閉口仕候
- 時節柄御自愛專一
- 御承諾の有無
- 御誤解のやうにも
思はれ
- 誤謬の様にも思は
れ候
- 何品の有無
- 品切中に候や
- 定價用方等御知ら
せ下され度候
- 仰せの如く(貴命の
如く)いたし候ひし
も
- 御承諾の有無
- 御誤解のやうにも
思はれ
- 誤謬の様にも思は
れ候
- 何品の有無
- 品切中に候や
- 定價用方等御知ら
せ下され度候
- 仰せの如く(貴命の
如く)いたし候ひし
も
- なかくに出来申

大 正 新 書 翰

- 拙家一同無事に暮
し居候
- 御答禮の印までに
何々差上げ申候
- 御笑味下さらば幸
甚
- 何かと御用になら
ば至極幸甚に候
- 右御禮まで如此に
御座候
- ◎照會
- 兼ねての御願如何
- 相なり候や
- 過日御願申上候件
如何に相成り居り
候や
- 過日御話の件承り
候へば何々の由
- 御伺申上候
- 何卒委細御漏し下
され度
- 事實御漏し被下度
- 御調べ被下度
- 詳細御取調の上
- 御知らせ下され度
- 御承諾の有無
- 御誤解のやうにも
思はれ
- 誤謬の様にも思は
れ候
- 何品の有無
- 品切中に候や
- 定價用方等御知ら
せ下され度候
- 仰せの如く(貴命の
如く)いたし候ひし
も
- なかくに出来申

さず

- 大 正 新 書 翰
- 只今御使と稱して三十位の男参り候へども甚だ疑はしく候へば
 - 疑はしき點も見受け候まゝ
 - 御伺申上候
 - 御照會申上候折かへし御返事被下度
 - 御調べの上至急御一報を煩し度
 - 御榮轉の由
 - 何日頃御赴任(御出發)に候か
 - 少々御聞かせ下され間敷や
 - 御差支なき限は是非共御漏し被下度候
 - 委しく(詳細に)精密に御知らせ被下度候
 - 御都合如何に候はむ
 - 御都合次第にて出向候
 - 御都合御伺ひ申上候
 - 此段(右)御照會に及び候
 - ◎紹介
 - 此君(某君)は小生の知友にて長く某地に居り
 - 友人某君從來某業に従事いたし居候處

- 大 正 新 書 翰
- 都合にて某地に出張(赴任)仕り
 - 今般都合により上京(出京)
 - 都合により退職
 - 今までは何々に従事致し居り
 - 先頃まで某省に奉職(某社へ勤務)
 - 相當の職もあらば
 - 何卒御周旋被下度
 - 詳細は本人より申し上げん
 - 委細は本人より御聞き取り被下度候
 - 御紹介申上候
 - 何卒御面謁被下度
 - 何業には本人大本望にて
 - 某方面の事業に従
 - 御多月中恐入り候へども
 - 甚だ恐縮に候へども
 - 御教示被下度候
 - 御周旋願度候
 - 事いたし度よし
 - 御心あたりもあらば

大正新書翰 (終)

大正元年九月廿五日印刷
大正元年十月一日發行

定價金五拾錢

著者

百舌居士

東京市神田區表猿樂町廿三番地

發行者

森本謙藏

大阪市東區南久寶寺町四丁目十九番地

發行者

森本專助

大阪市西區阿波座二番町一番地

印刷者

堀越幸



發行所

東京大阪

大販賣所

大阪市南區心齋橋筋壹丁目四十三番地

販賣所

森本開文館

松村九兵衛

全國各書林

267

968

終